

【表現学関連分野の研究動向】

## 認知言語学

田村 敏広

認知言語学は理論的深化・精緻化を進めながら、同時にその学際性を確実に高めている。認知言語学のこのような潮流の中、2021年にはどのような動きがあったのかを振り返ってみたい。

構文文法は認知言語学分野の中でも特に注目度の高い理論であり、この枠組みでの研究は非常に盛んである。2021年の日本認知言語学会ではMartin Hilpert氏による構文文法をテーマとした特別講演（演題：The road ahead for Construction Grammar: Connections, controversies, and collaborations）が開催され、構文間のネットワークの精緻化や理論的に未解決な問題が話題として取り上げられた。今後、構文文法理論の更なる深化・精緻化が期待される。また、構文文法理論にとっては、Adele E. Goldberg (2019) Explain Me This: Creativity, Competition, and the Partial Productivity of Constructionsの翻訳である、木原恵美子他訳(2021)『言えそうなのに言わないのはなぜか—構文の制約と創造性—』(ひつじ書房)が出版された意義も大きい。本書は、構文文法理論を基盤として、構文ネットワークの構築・獲得がどのようになされるのかをコーパスデータや実験を基に検証している。構文文法、使用基盤モデルといった認知言語学の諸理論から心理言語学分野にまたがる横断的研究であり、認知言語学の学際性への貢献は大きいであろう。

また、出原健一(2021)『マンガ学からの言語研究「視点」をめぐって』(ひつじ書房)も認知言語学の学際性の高さを示すものである。本書は、認知言語学の視点論の知見を用いて漫画の分析を行なっている。特に、漫画のルビの分析は興味深い。客観的把握に基づいた表現に主観的把握に基づいた表現のルビが振られることで、読者に同時に複数の「見え」を提供し、作品世界への没入を促すのだという。本書は認知言語学を基盤としたマンガ学の新しい方法論を提案しているだけでなく、認知言語学がメディア分析、また他の領域にどのように広がりうるのか、その秘められた可能性を教えてくれる。

近年の認知言語学における学際化の進展が目覚ましいのは間違いない事実であろう。このような進展の中だからこそ、山梨正明(2021)『言語学と科学革命 認知言語学への展開』(ひつじ書房)は非常に重要な意味をもつ。本書では、構造言語学から、生成文法、生成意味論、そして認知言語学へのパラダイムの展開が広い視点から記述されている(第1章～第5章)。認知言語学が学際性を高めてきたからこそ、改めて認知言語学を過去から見直し、未来への展望を考える必要があるのではないか。加えて、第6章「言語科学の新たな展望」では、認知言語学の開放性と他領域への適用性の高さが高い学際性を生み出していること、また、認知言語学の言語理論としての健全性をどのように保っていくべきかが論じられている。本書は、認知言語学者・認知言語学を志す者に、「これまで」と「これから」を教えてくれる意義深い一冊であろう。

今後も認知言語学は確実に学際化の道を進んでいく。認知言語学がその健全性を保ちつつ、どのように形を変えていくのか注視していきたい。(静岡県立大学)